高山の文化を高めた人々 55

絵画、方言研究
岩島　周一

岩島　進

大正七年に丹生川で生まれた父・周一は尋常小学校四年生の夏に結核性関節炎を発症し、その後病気がちになり六十歳頃までは幾度も入退院を繰り返しました。回復すれば生活もあるので職に就き、またしばらく経つと発病するという、健康には恵まれない生活が続きました。それでも回復すれば、農作業はできませんが家でできる仕事などをかなり晩年までやっておりました。

父はそんな中で、若い時期から日本画を描き、木版画を制作し、晩年になってからは飛騨の方言に興味を持ち方言集などを刊行し、昭和から平成にかけての約七十年間、変わりゆく飛騨を見つめながら作品を作り続けてきました。

若き日の岩島周一

父の略年譜によると昭和十六年の「第一回飛騨美術協会展」に日本画を出品していますので、その少し前から日本画を始めたものと思われます。生前父は、「もともと絵が好きで、少年雑誌などの活劇小説の挿し絵を見て描くようになった」と話していました。

昭和二十四年、守洞春先生主宰の「第一回黄玄展」に参加し日本画を出品、同三十一年「第一回高山市展」にも出品、その後「岐阜県展」に数回、また「現代水墨画協会展」にも出品しています。

昭和六十年、同志の人たちと共に「飛騨水墨画協会」を設立します。この時期のしばらく前から、水墨画をさかんに描くようになり、晩年まで筆を持っていました。

昭和五十九年には、高山市内で水墨画教室「墨彩会」を始めています。記録は定かではありませんが、丹生川地区でもこの前後に水墨画教室「丹水会」を始めていました。日本画を通して長年交流のあった人たちの中には、指導者的な立場の守洞春先生の他、新名隆太郎さん、花本喜太郎さん、山腰曠さんたちがおられました。

昭和45年版画展にて

木版画は、記録によると昭和三十六年に「日本版画会展」に初出品していますので、始めたのはその時期近くと推察されます。以前から親交のあった守洞春先生との関係で版画に興味を持ち、木版画を始めるきっかけになったと聞きました。

父は、主に飛騨の風景や生活などを好んで題材とした作品を制作し続けました。版画を始めて間もない昭和三十七年に「東光展」初出品で「円空鉈削仏」が奨励賞となり、その後東光会々員として晩年まで東光展に出品を続け、その間には日展にも入選しました。

版画の同志の方たちには、前述の洞春先生の他、船越山治さん、中野幸一さんたちとも長年交流があり、また東光会の仲間としては、洋画家の小枝利汎さんとも長年交流がありました。

昭和五十四年、右足の病状が悪化して、またも入院しましたが、その折りに飛騨に伝わる方言に興味を持ち、病床でメモを取り始めたのが後の方言シリーズの著作の発端となったようです。そして、昭和六十年ごろから平成十八年までの間に、方言を中心に十冊近くの著作を出版しました。また、自分の著作のみならず、谷口岩雄（筆名　ののむらすすむ）さん著書の挿し絵も数冊描きました。

若い頃には、地元丹生川で短歌会のグループにも入り、短歌に親しんだ時期もあったようです。

父の一生は病気に苦しめられた一面もありましたが、それを克服して大正、昭和、平成を生きて飛騨の美術界の同志の方々や、多方面の方々との交流の中で、長年親しんできた飛騨を表現できたことを、この上ない幸せと感じていたと思っております。

（平成二十二年没、享年九十二歳）

平成8年版画展にて